

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：58001
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：25760011
研究課題名(和文) 琉球列島米国民政府(USCAR)フィルムと占領下の沖縄

研究課題名(英文) USCAR-Produced Films and Okinawa under Occupation

研究代表者
名嘉山 リサ(Nakayama, Risa)
沖縄工業高等専門学校・総合科学科・准教授

研究者番号：80455188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：戦後27年間のアメリカによる沖縄統治時代に、琉球列島米国民政府(USCAR)は統治をスムーズに行う目的でプロパガンダ映像などを作成し沖縄住民向けに放映した。本研究では沖縄県公文書館や米国国立公文書館所蔵のUSCAR制作フィルムを閲覧・複製し、その制作背景やUSCAR広報局・視聴覚課の役割などについて調査した。1950年代に作られたニュース映画やドキュメンタリー映画の制作や上映に関する背景、1960年代以降のテレビ番組制作に至る経緯や制作・放映の背景など、USCAR制作フィルムの実態を調査し、映像という視点から米国の沖縄占領政策における広報外交の役割や諸相を探った。

研究成果の概要(英文)：During the 27 year U.S. rule of Okinawa from 1945 to 1972, the U.S. military government used audiovisual media as part of its educational and public relations activities. The United States' aim was to govern Okinawa smoothly by garnering the local residents' understanding for their occupation policies through these activities. By viewing and analyzing the USCAR-produced films preserved in the National Archives and Records Administration in the US and Okinawa Prefectural Archives and doing research on the audio-visual section of the Public Affairs Department of USCAR, I attempted to elucidate the actuality of these films and the roles of public diplomacy through visual media in pursuing occupation policies.

研究分野：アメリカ映画研究

キーワード：USCAR 琉球列島米国民政府 占領 広報外交 フィルム テレビ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は2010年度から2012年度まで、「歪められた沖縄像 『八月十五夜の茶屋』小説・演劇・映画の比較検証」(課題番号22520289)というタイトルで、終戦前後の沖縄を舞台にした作品の共同研究を行ってきた。フィクションではあるが、当時沖縄に駐留した退役軍人が描いた作品にはその頃の沖縄の状況が現実的に描かれている部分もあり、作品分析のみならず、当時の状況の調査もある程度行ってきた。その過程でアメリカ統治下の沖縄の様子が垣間見えてきたことや、本土復帰40周年という節目の年ということも重なり、折に触れて27年間のアメリカ占領時代を考える機会が増え、ノンフィクションの映像の調査・分析を行い、戦後の沖縄とアメリカの関係を別の角度から探りたいと考えるに至った。

米統治下の沖縄で、琉球列島米国民政府(United States Civil Administration of the Ryukyu Islands, 以下USCAR)が映像を使った広報活動に尽力していたことが分かったが、その制作映像に関して、放送や言論関係の総論的な著作はあったものの、映像の内容に踏み込んで分析を行った先行研究は見当たらなかった。辻村明・大田昌秀著『沖縄の言論 新聞と放送』(南方同報援助会、1966年)では、USCARがラジオやテレビの放送枠を買い、制作した番組を放送していたことが記され、一週間のうちにどの番組がどの放送局でどの程度放送されたかが表で示されている。「時間量としては大して多くはないが、『政府の時間』としては多いほうであろう。」(p.191)としており、USCARが広報活動に力を入れていたことが分かるが、本書では1ページを割いてデータを表示し、解説を少々付すにとどまっている。宮城悦二郎著『沖縄・戦後放送史』(ひるぎ社、1994年)でも、第5章「米民政府のメディア制作」として新聞、雑誌、テレビ局の開局を含め総合的に解説されているが、USCAR制作の映像については、番組名や放送された曜日などの提示にとどまっている。また、川平朝申著『終戦後の沖縄文化行政史』(月刊沖縄社、1997年)でも、当時放送された番組の内容が記述されているのみである。

それまで、沖縄県内や山形国際ドキュメンタリー映画祭などでアメリカ統治時代にUSCARによって制作された映画の上映・解説が時折行われ、占領当時の沖縄を語るうえで貴重な資料と評価されてはいたが、取り上げられたのは『琉球ニュース』や『起ちあがる琉球』など特定のタイトルや時期に限られており、学術的な研究発表などが行われたこともなかったようであった。

沖縄県公文書館には約100本のUSCAR制作映像が所蔵されているとのことで調査を行ったところ、それ以外にもUSCAR制作のフィルムがかなりの数存在することが分かった。沖縄県公文書館作成の「米国民立公文書館所

蔵琉球列島米国民政府フィルムガイド」によると、これらのフィルムは琉球列島におけるUSCARの活動を人々に知らせることで住民から支持を得、米国の目的をスムーズに遂行することを目的とし、米国民政府広報局、情報部、視聴覚課により制作されたのだが、沖縄の復帰時に米国民立公文書館(National Archives Records Administration, 以下NARA)に移送されたとのことであった。(ただし、琉米親善会館などに保管されていたフィルムの一部は移送されず、『琉球ニュース』のように現在でも沖縄県内に残っているものもある。)

NARAに移送されたUSCAR制作フィルムはその後20年間利用されていなかったが、NARAによる再評価の結果、他の所蔵映像資料と内容が重複しているため、2000本以上のUSCAR制作フィルムが沖縄県公文書館に寄贈されることとなった。しかし、その当時調査を行っていたある研究家が、USCAR制作フィルムは米国の沖縄統治政策を知る貴重な資料で、NARAに残すべきと主張し、NARAの再評価の妥当性に関して訴訟を起こした。1年にも及ぶ裁判の結果、NARAの再評価が適切でないとの判決が下され、沖縄への寄贈は無効になり、現在でもNARAがこれらのフィルムを保管しているといういきさつがある。

このような背景から、アメリカの占領政策を探るうえで、活字メディア同様に貴重な資料である映像メディアの研究は、一次資料にまとめてアクセスすることが困難で、まとまった情報を得られにくいということなどから立ち遅れていたようであった。

2. 研究の目的

前述のフィルムガイドによると、NARAは2297本の16mmフィルムや14本の35mmフィルムなどを所蔵しており、そのうち編集され放送されたとみられる16mmフィルムは約300本ほどとのことである。また、USCAR制作フィルムの主なトピックは、米国民政府主催の読書週間、青少年科学の日、琉米文化会館での活動等の文化事業、愛楽園や愛燐園などの施設、赤い羽根募金・福祉事業に関わる琉球・米国人の活動、道路・橋の工事現場、水道・下水道・電力施設の建設現場やその落成式、離島紹介、高等弁務官の沖縄各地訪問、米軍の琉球住民への奉仕活動や援助活動、米国への留学制度などである。NARAからの寄贈が取りやめになったのち、沖縄県公文書館は約100本を複製・収集し一般公開しているが、その後収集する予定はないようであった。本研究では、まずその100本を閲覧・複製し、同時に県公文書館が入手した作品以外の編集された映像を入手し、将来的に一般公開することを目的とした。復帰から今日に至るまで、沖縄の都市開発・再編は加速度的に進み、アメリカ統治時代の建築物が取り壊され街の風貌も変化してきている。今後復帰50年60年と時を経るにつれ当時を知る人が少な

くなると、アメリカ統治時代の映像はますます貴重な資料となる。占領期の沖縄を映したフィルムをなるべく多く収集し、当時の関係者から情報を収集することは急務だと思われる。

これまで県内の放送関係者や学芸員の方々がフィルムを収集・管理し、沖縄関係映像資料の収集・保存状況を報告してきたようだが、映像研究の立場から USCAR 制作フィルムに深く関わり、学術調査を行った事例はないようであった。これまで行ってきた映画・映像研究やアメリカ研究のバックグラウンドを生かし、映像資料の整備に貢献できるのではと考えた。そして、USCAR 制作フィルムを年代別、テーマ別などに分類し具体的な分析を行うことを目指した。同時に、NARA などの研究機関で USCAR 広報局に関する資料調査を行い、これらのトピックが選ばれた背景や、ドキュメンタリーあるいはニュース映画やテレビ番組として企画・制作された背景、どれだけの人がこれらの映像を視聴したのか、USCAR の統治政策上これらのフィルムにどのような意義がありどれだけの影響力を持っていたのかなど、これまで沖縄研究、アメリカ研究、映像・メディア研究等の分野でさほど注目されてこなかった点を解明することを目指した。占領時代に沖縄住民に対して提供された映像の全体像を明らかにし、沖縄とアメリカの関係性を映像の面から探ることを目的とした。

3. 研究の方法

まず沖縄県公文書館所蔵の USCAR 制作フィルムを視聴・複製し、その内容についての調査を行った。また、那覇市立中央図書館など他の機関に所蔵されている関連映像の視聴や上映・放送記録などの記された資料や新聞の調査を行い、沖縄県内にある資料を確認した。プロパガンダ、パブリック・ディプロマシー、米国占領などに関する基礎文献の調査も行った。

そして米国国立公文書館所蔵の USCAR 制作フィルムを視聴・複製し、USCAR 広報局関連文献の調査を行った。映像資料の数が膨大なうえ、複製申請回数に限られているため、何度も通う必要があった。また、関連文書については映像に関するものが USCAR 文書(あるいは他の文書)のいたるところに紛れていることもあり、膨大な数の資料を確認する必要があった。コロンビア大学、東アジア図書館所蔵の牧野守氏コレクションにも USCAR 制作映像関連文書があり、貴重な資料を入手できた。

また、米国国立公文書館から映像資料の寄贈の話があったところに、すべてのフィルムを閲覧しフィルムガイドの作成に関わった方々から情報収集を行った。さらに、元放送局関係者を通じて、あるいは地元紙に本研究に関連する内容を執筆することで、当時の状況について詳しい方や関係者などから話を

聞くことができた。元 USCAR 広報局視聴覚課の職員や、その他 USCAR のテレビ番組の制作に携わった経験のある方々へインタビューを行い、当時の状況について情報を得た。その他にも作品に取り上げられたトピックや地域に詳しい方に協力を依頼し、映像の内容の特定に努めた。

開局間もない 60 年代ごろの沖縄のテレビ放送は基本的に生放送だったようで、残存するフィルムの大半が無声の映像だが、発掘したナレーション原稿などを元に一部番組を復元する作業を、放送局関係者の協力を得て行い、映像上映や分析に役立てた。

4. 研究成果

1950 年代以降の沖縄の新聞の調査などにより、USCAR 制作ニュース映画『琉球ニュース』の制作開始時期や内容、映画館での上映日や場所などが分かった。しかし、映像も文献も限られており、全体像を詳細に把握することは出来なかったため、引き続き調査が必要である。米国へ留学した学生のドキュメント『明日を導く人々』(1952 年)の上映場所や時期等についても新聞調査で判明した。

また、PR 映画『起ちあがる琉球』の制作背景や内容について *Rising Ryukyus or Not Rising Ryukyus?: Ulterior Motives for the Production of Rising Ryukyus (1953)* というタイトルで口頭発表を行い、それを元に論文を執筆した。本作は移民促進映画として近年県内外で上映されてきたが、当時の沖縄の新聞やアメリカ側の関連資料、映画の内容を精査していくと、県内で移民を促進するために作られた作品ではなく、戦前に国外に移住した移民に向けて、海外移民をさらに送り出すべく資金集めの目的で制作されたことが分かった。

米国国立公文書館の映像部門には、一部閲覧用に 16mm フィルムからデジタル化(DVD 化)されたものがあるが、本研究で収集予定の編集済み映像は限られており、新たにデジタル化申請をした。当初外部業者に委託することを考えていたが、予想をはるかに超えるコストがかかることが分かり、無料で行える直接申請の方がメリットが大きいと考え、その方法を取ることにした。予算と時間の都合上、研究期間内に編集済みの映像をすべて入手することはできなかったが、入手できた映像や音声だけでも、様々な情報を得ることができた。また、沖縄県公文書館所蔵の無声の同じ映像が、米国の公文書館で閲覧すると有声だったというような発見もあった。本件についても継続的に申請・複製を続ける必要がある。

フィルムとともに保管されていた紙媒体の資料を調査し、関係者から聞き取りを行ったところ、どのようにフィルムのリストが作られ、これらのフィルムがどのような経緯を経て現在 NARA に保管されるに至ったかが分かった。またフィルム缶に入っていたタイト

ルなどが書かれたメモ用紙、番組のナレーション原稿、USCAR 婦人クラブ関係の資料などを確認した。USCAR 全体の文書の中にも、広報局視聴覚課に関する資料が様々あり、ある時期のスタッフの情報、番組の詳細、予算、領収書、出張資料、内部メモ等などの資料から、番組制作に関する情報が分かってきた。また、USCAR 広報局が沖縄を舞台にした日本の戦争映画の SCRIPT チェックを行っていたことが分かる資料も、USCAR 文書以外の文書の中から偶然見つかった。

1960年代に、USCAR が外部に委託して制作した『沖縄の生産業』シリーズについても、資料調査と聞き取り調査で、制作背景やシリーズの詳細などの情報を入手できたため、今後論考をまとめる予定である。

米国国立公文書館で発掘した『人・時・場所』『テレビ・ウィークリー』など、テレビ局開局以降定期的に放送された番組のナレーション原稿と映像・音声資料を基に、放送関係者や沖縄県公文書館の協力を得て番組を復元し、「USCAR と沖縄のテレビメディア 1970 年前後」と題した一般向けの講演と上映を行った。予想以上の観客が県内外から訪れ、めったに見ることができない、復帰前の沖縄の映像を見ることができ、その当時の状況について考えさせられたと、良い反応を得ることができた。無声のモノクロ映像をさほど手がかりもなしに鑑賞することは多少厳しいことかと思われるが、ナレーションや音声、解説付きで上映することで、これら一連の映像について、広く一般の人々にわかりやすく伝えることができたのではと思う。本イベントは地元のテレビメディアにも取り上げられた。

■沖縄県公文書館 公文書活用講座■

USCAR と沖縄のテレビメディア

—1970年前後—

2015
11/21(土)
午後2時～4時30分

第1部 講演

「USCAR と沖縄のテレビメディア—1970年前後」
講師 名嘉山リサ (沖縄工業高等学校 准教授 映画・アメリカ研究)
コメンテーター 新里勝彦さん (元琉球放送報道部カメラマン)

第2部 上映 (ナレーション付き)

- 「人・時・場所 文化クラス」1970年
- 「TVウィークリー 新しく設けられた先手食品販売店」1967年
- 「TVウィークリー 年末助け合い」1971年

沖縄県公文書館はUSCAR (琉球列島米国民政府) が住民向けに制作した映像資料約100タイトルを所蔵しています。これらの映像の多くは地元テレビ局の番組として放送されました。本県国境下の沖縄を扱った貴重な映像ですが、音声はついていません。

近年、米国国立公文書館でそのナレーション原稿や録音が見つかりました。新資料発掘の経緯に触れながら、これらの映像がテレビで放送された経緯や、USCAR 広報局のメディア政策などを考えます。

■沖縄県公文書館 講座 沖縄県県立総合文化センター 148-3
■定員80名 入場無料・申込不要
■お問い合わせ 098-888-3875
■主催 沖縄県公文書館指定管理者 (公財) 沖縄県文化振興会

図1 イベントチラシ (沖縄県公文書館提供)

その講演内容を改編し、「1970 年前後の USCAR 制作テレビ番組 『人・時・場所』と『テレビ・ウィークリー』の制作背景とテレビメディアを使った広報外交」というタイトルで論考をまとめた。その後、実際にその番組制作に携わった方から聞き取りを行うことができ、文献からは得られない生の情報を得ることができた。本研究期間に行ったインタビューは文字起こし、入手した映像とともにシリーズごとに出版することを連携研究者と計画中である。活字で書かれたアメリカ統治時代の歴史だけでなく、映像で描かれた歴史を探ることにより、当時の状況が違った角度から、より鮮明に浮き上がってくると思われる。

さらに、調査の過程で英語の番組の原稿やリストにはないタイトルなどが見つかったが、その映像の所在についてなど、新たに解明すべき課題も出てきた。今後は、未編集素材をふくめたすべての USCAR 制作フィルム の収集、NARA 所蔵の同様の戦後沖縄関連のフィルムの調査、日本本土占領期の CIE 映画などの比較や受容研究、戦時下に作られたプロパガンダ映画との比較研究など、本研究をさらに発展させたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 名嘉山リサ 「1970 年前後の USCAR 制作テレビ番組 『人・時・場所』と『テレビ・ウィークリー』の制作背景とテレビメディアを使った広報外交」 沖縄工業高等専門学校紀要、査読有、第10号、2016年、pp.41-53
<http://okinawa-repo.lib.u-ryukyuu.ac.jp/handle/okinawa/19363>

(2) 名嘉山リサ 「琉球列島米国民政府 (USCAR) 制作フィルムの現状について」 越境広場、査読無、第0号、2015年、pp.193-195

〔学会発表〕(計7件)

(1) 名嘉山リサ 「USCAR と沖縄のテレビメディア - 1970 年前後」 沖縄県公文書館公文書活用講座、2015年11月21日、沖縄県公文書館：沖縄県南風原町

(2) 志村三代子、名嘉山リサ 「サイパンから沖縄へ 『戦場も永遠に』の映画化をめぐる」 冷戦研究会第23回例会、2015年11月14日、東京大学：東京都目黒区

(3) Risa Nakayama “USCAR-Produced Films and Okinawa under US Occupation.” Public Symposium: Media Cultures of Wartime and Postwar East Asia, September 15, 2015, Georgetown University: Washington, DC

(4) Risa Nakayama “ Rising Ryukyus or Not Rising Ryukyus?: Ulterior Motives for the Production of *Rising Ryukyus* (1953). ” Society for Cinema and Media Studies Conference, March 25-29, 2015, Montreal: Canada

(5) 名嘉山リサ 「米国における USCAR フィルム調査の成果と課題」琉球列島米国民政府(USCAR)制作フィルム第4回鑑賞・検討会、2014年12月4日、京都大学：京都府左京区

(6) 名嘉山リサ 「『起ちあがる琉球』にみるアメリカの思惑」琉球列島米国民政府(USCAR)制作フィルム第3回鑑賞・検討会、2014年7月5日、那覇市 NPO 活動支援センター：沖縄県那覇市

(7) 名嘉山リサ 「USCAR フィルムと占領下の沖縄(『琉球ニュース』と『起ちあがる琉球』について)」日本映像学会第40回大会「南島、内なる現実、外からの幻想～映像になった沖縄、内から外から」シンポジウム、2014年6月7日、沖縄県立芸術大学：沖縄県那覇市

〔その他〕
ホームページ等

沖縄県公文書館 公文書活用講座関連 HP

<http://www.archives.pref.okinawa.jp/publication/2015/11/1121.html>

<http://www.archives.pref.okinawa.jp/publication/2015/11/119-2.html>

<http://www.archives.pref.okinawa.jp/publication/2015/11/post-587.html>

<http://www.archives.pref.okinawa.jp/publication/2015/10/1121uscar1970.html>

名嘉山リサ 琉球新報「落ち穂」(コラム、本研究について数回執筆) 琉球新報、文化、2015年7月～12月

名嘉山リサ 「琉球列島米国民政府(USCAR)フィルムと占領下の沖縄 フィルムの概要と調査状況について」日本映画学会会報 第41号 2014年12月21日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

名嘉山リサ (NAKAYAMA, Risa)

沖縄工業高等専門学校、総合科学科、准教授

研究者番号：80455188